[mei\_cg\_1]

？？？「手を離してくださいーーーーー！！」

左手に柔らかい感触を覚えて、冷や汗が一筋。

見てみたら、倒れた拍子に少女を支えようとしたはずの右手が、よりによって胸を鷲掴みしてて。

榊原　「悪いっ、決してわざとじゃ──。」

？？？「ひぃえええええええええん！！」

[sayo\_cg\_1]

榊原　「……なっ…………。」

見知らぬ少女が、俺の手を握って寝ていた。

途端に頭に甦ってくる、昨日の話。

早希　「……あのね、出るらしいよ。」

榊原　「何が？」

早希　「……幽霊、女生徒の。」

榊原　「うわぁああぁあああ！！」

反射的に叫んだ。

昨日は馬鹿馬鹿しいとか思ったけど、流石にこんなことになると怖い。

て言うか、幽霊とか幽霊じゃないとか関係なくベッドの中に知らない人がいたら怖い。

てかここ男子寮だろ！？

何で女子がいる！？

？？？「……ん……。」

目を開けた少女はゆっくり起き上がって、呑気に欠伸しながら目を擦ってる。

[miu\_cg\_1]

屋上のドアを開けると、絶えずキョロキョロしてる安達さんがすぐに見つかった。

あの様子だと、やっぱりストラップを探してるらしい。

榊原　「よかった、ここにいた。」

美羽　「……あんたもしつこいわね。

　　　　あたしは忙しいの、あんたなんか構ってらんない。」

榊原　「その忙しさの原因はこれだろ？」

ポケットからストラップを出して安達さんに見せる。

美羽　「！！」

榊原　「やっぱり安達さんの物だったんだ。

　　　　拾っといてよかった。」

美羽　「……ふん、余計なお世話よ。」

安達さんはストラップを引ったくるように受け取る。

美羽　「お礼なんか言わないから。」

榊原　「構わないさ、言われたかったわけじゃないし。」

美羽　「どうだかね。

　　　　口先だけなら何とでも言えるわ。」

[mei\_cg\_2]

小夜が指差したステージには、マイク前で生まれたての子鹿みたくなってる相原さんを心配そうに見守る和泉さん達の姿があった。

命　　「きっききょきょうは、あ、あつまってくっくだ……くだっさって、あ……あ、ありがとっ、ごじゃいまひゅっ！」

相原さんが思いっ切り噛んだことに笑うギャラリー。

ただでさえ大勢の視線に晒されて限界寸前だっただろう彼女は、一瞬で青ざめた。

命　　「……………………。

　　　　………………………………。

　　　　…………………………………………。」

次の言葉を待っていたギャラリーは、黙り込んでる相原さんを不審に思い始める。

まずい……このままじゃ演奏時間が終わってしまう。

それだけは……。

それだけは、避けないと……！

それしか考えられず。

榊原　「めーーーーーいっ！！」

命　　「さ、榊原さん……！？」

急に叫んだ俺に視線が集まる。

それに気付いて、冷や汗が一筋、背中を伝う。

けど。

榊原　「大丈夫だから！！」

そんなことよりも、今だけは彼女に……。

命に、勇気を出してほしかった。

命　　「榊原さん…………。」

命　　「聴いてください。

　　　　──空の彼方。」

[sd\_cg\_1]

何回か曲を流し、早希は曲に合わせながら口ずさんでリズムを覚えようとしてる。

早希　「ふーんふーーん、ふんふんふんふんふんふんふーーーーん……。」

まだ始めたばかりだから仕方ないけど、音程はひどく外れ、テンポもずれている。

相原さんの歌で耳が肥えてしまったのか、早希には悪いが耳を塞ぎたい気分だ。

命　　「さ、早希さん、その……。

　　　　とりあえず、もっと音をよく……聴いて下さい。」

早希　「ふーんふーーん……。」

命　　「そっ、そこの音程は上がります、下がりません。」

早希　「ふーんふーーん……ふんふんふんふんふんふん……。」

命　　「その部分は、もう少し、はっきり音が上下してます。」

早希　「えっ、できてなかった！？

　　　　ちゃんと上げたり下げたりしたつもりだったけど！？」

命　　「今のだと、その……どちらかと言うと……お、お経のような……。」

早希　「お経！！？」

命　　「ご、ごめんなさい！」

早希　「いや、謝らなくていいんだよ！？

　　　　でも、お経かぁ……どうやったら上手く音合わせられるかなぁ……。」

命　　「私の場合だと、何回か聴けばいつの間にか合わせられるようになりますけど……。」

早希　「うーん……。

　　　　じゃあ、とりあえず……反復練習続けてみる？」

命　　「そ、そうしましょう。

　　　　では、最初から。」

早希　「ふーんふーーん、ふんふんふんふんふんふんふーーーーん……。」

命　　「さ、最初の音がまた下がってます……。」

早希　「うそぉーん！？」

命　　「それから、もっと落ち着いて、ゆっくり歌って下さい。

　　　　今のだと原曲より速いです。」

早希　「お、落ち着いて……ゆっくり……。」

命　　「では、もう一度最初から……。」

[miu\_cg\_2]

美羽　「どうして……こんなこと……っ。」

少し重い瞼を開けると、目の前にはボロボロと涙を流す安達さんの顔。

俺……屋上から落ちたよな？

なのに、生きてる……。

それどころか、体のどこにも痛みを感じない。

榊原　「……何でだ……？」

美羽　「！？

　　　　榊原っ……生きてるの！？」

早希　「榊原くん、よかった……！！」

命　　「助かった……のですか……？

　　　　あんなところから落ちたのに、どうして……。」

栞　　「榊原さん！！」

榊原　「……神楽坂先生……。」

栞　　「ああ、よかった無事で、本当に……！

　　　　でも、あの高さから落ちてどこも出血してないなんて……。」

榊原　「っ……そうだ、小夜は！？」

栞　　「小夜ちゃんは……。

　　　　大丈夫よ、意識はないけど脈はあるわ。」

榊原　「…………よかっ、た……。」

ロコ　「にゃー。」

榊原　「ロコ……お前も無事だったか。」

ロコ　「にゃうっ。」

榊原　「ははっ……こんな時まで逃げなくてもいいだろ……。」

美羽　「ごめんなさい……あたしのせいで、こんなことに……。」

榊原　「安達さんはちゃんと反省してるんだから……今更責めたりしないさ。

　　　　俺も、きっと小夜も。」

美羽　「違う……そういうことじゃなくて……！

　　　　あんた達がこうなった原因は、あたしがロコを部室から連れ出したこと……。

　　　　あたしが馬鹿なことしたせいなのに……何で簡単に、そんなこと言っちゃうのよ。

　　　　あんた達があたしを許してくれても、あたしは一生自分を許せないわよ……！」

早希　「美羽ちゃん、何もそこまで──。」

榊原　「……そんなに許せないか？」

美羽　「っ……当然よ

　　　　だから、ちゃんと償うから……何でもするから……！」

榊原　「……じゃあ、そうだな……。

　　　　気が向いたらでいいから、また部室に顔を出してくれ。」

美羽　「…………は？

　　　　何それ……それだけ？」

榊原　「ああ……ダメか？」

美羽　「ダメって言うか……意味が分かんないわよ。

　　　　あんた、本当にあたしがしたこと分かって──。」

榊原　「俺は単純に、美羽がいてくれた方が嬉しい。」

美羽　「…………！？」

榊原　「それだけじゃダメか？」

美羽　「……あんた、卑怯だわ……。

　　　　そんなこと……名前呼びながらなんて……。」

榊原　「あー……ごめん、何か自然に……。

　　　　嫌なら、やめるけど……。」

美羽　「……勝手にしなさいよ、もう……。」

それはきっと、美羽なりの肯定の意思表示なんだろう。

[sd\_cg\_2]

美羽　「やっぱり、どうしても寂しいものね。

　　　　あと数時間でロコがいなくなるなんて。」

早希　「あーあ、欲を言えばもっとロコちゃんと遊びたかったなぁ。」

美羽　「……寂しいけど、あたしはこれでよかったと思ってるわ。

　　　　こんな狭い部室から出られないんじゃ、ロコだって窮屈だろうし。

　　　　もっと広い外で遊んだ方が、きっとこの子のためよ。

　　　　……あんな馬鹿なことしといて、説得力なんか微塵もないだろうけどさ。」

早希　「……ロコちゃんはさ。

　　　　新しい飼い主に引き取られて、新しいお家で暮らす内に……。

　　　　私達のこととか、いつか忘れちゃうのかな。」

美羽　「……………………。

　　　　ねぇ、ロコ……。

　　　　あんたはあたし達のこと、覚えててくれるの？」

ロコ　「にゃー？」

美羽　「……なーんて。

　　　　あんたに聞いても、分かるわけないわよね……。」

早希　「……………………。」

始終そんな寂し気な、けど温かく感じる空気が部室を満たしていた。

[CG\_rumi1-1~3]

校舎裏に辿り着くと、奥の方に2人が見えた。

渡部　「────────。」

瑠美　「────！」

渡部　「──────────。

　　　　──────。」

瑠美　「──────。」

息を潜めてそっと様子を窺うが、遠すぎて2人が何を話してるのか全然聞こえない。

どうする……もう少し近づくか？

いやでも、極力見つかりたくはない。

攻撃仕掛けるなら、奇襲の方が有利だからな……。

なるべく気付かれない内に、一撃で仕留めるのが得策なんだが……。

狙うなら、そうだな……。

渡部の体勢的に首の側面に手刀当てるか、拳で脇下抉るかのどっちかだろう。

上手く当たれば、気絶させられるかもしれない。

でも、ここからじゃ遠すぎて仕留める前に気付かれるだろう。

どの道、もう少し近づかないと……。

なるべく音を立てないように植え込みや木に隠れて……桜庭さんにも渡部にも気付かれないように……。

瑠美　「確かに……あれはわたくしのミスですわ。

　　　　でも、だからと言ってあなたの要求は呑めませんわ！」

渡部　「お前、人に迷惑かけといて詫びようって気持ちもねーの？

　　　　とんだクソアマだなぁオイ。」

瑠美　「あなた……自分が何を言っているのか分かっていますの！？

　　　　それは犯罪ですわよ！！」

近づいてみると、2人の会話が明瞭に聞こえてきた。

渡部が何か要求してて、それを桜庭さんが拒否してるらしい。

犯罪って……あいつ、何を要求してるんだ……。

瑠美　「ああもう……話になりませんわ！

　　　　とにかく！

　　　　わたくしは断じてあなたなんかに従いません！

　　　　仕事がありますので、いい加減失礼しますわ！」

追記ーーー

ここにないＣＧの文章欄は空白で実装してください。